

## 『能ロミオとジュリエット』～観劇寸感

川地 美子

KAWACHI Yoshiko

昨今シェイクスピアと日本の伝統演劇を融合する試みが多くみられる。いわゆる intercultural Shakespeare として知られる舞台だが、これはシェイクスピア劇と伝統演劇の双方の価値の再発見につながるだけでなく、それぞれの方向を探求する上でも重要な演出法といえる。なかでも上田（宗片）邦義氏は1982年以来、単にシェイクスピア劇に能の要素を取り入れるのではなく、シェイクスピア劇と能とを合体させて、新しい創作能を上演するという極めて画期的でユニークな試みを続けてこられた。

これまでに上田氏は、シェイクスピアの四大悲劇を基に新作能を上演し、2015年12月には『能ロミオとジュリエット』を初演された。原作はシェイクスピア初期のロマンティックな悲劇で、詩的で抒情的な恋愛悲劇であり、四大悲劇のような性格悲劇ではない。この作品には、ヴェローナの敵対する家柄に生まれた若い男女の清らかで純粋な恋愛と、二人の運命的な出会いから痛ましい死に至るまでの過程が、一陣の風が吹き抜けるかの如き素早い時間の流れの中に描かれている。

上田氏はこの傑作を能にするにあたって、若者達の喧嘩をはじめとする激しい躍動感に満ちた物語の展開をロレンス僧や地謡に語らせ、仮装舞踏会での恋の芽生えからバルコニーの場における愛の告白、秘密の結婚と後朝の別れに至るまでの主筋に焦点を絞ることにより、恋人たちの瞬時的な愛の燃焼と成就を見事に表現された。

ラスト・シーンで二人が自害し、ようやく誤りに気付いた両家が和解して確執に終止符が打たれるが、この後に上田氏は、原作にはない新たな一場面を付け加えた。それは、ロミオとジュリエットが黄泉の国から霊となって白装束で現れ、相舞を舞ってのちに昇天する場面である。この加筆は、愛の永遠性を夢幻と幽玄の世界のものとして強く印象付け、さらに原作と能の合体を完璧なものにした。その結果、観客は、残酷な運命を背景にして描かれた清純で鮮烈な愛の尊さを読み取ることができたと思う。シテ（ロミオ）を務めた観世流の長老の野村四郎氏は熟練した演技力により、またツレ（ジュリエット）を務めた鶴沢久氏は美声によって観客を魅了した。

原作は人気作品であるだけに、翻案や改作が多い。例えば17世紀中頃にはジェイムズ・ハワードが、二人とも死なない悲喜劇に改作して評判をとり、一夜置きに悲劇と悲喜劇が交替で上演されたという記録が残っている。また20世紀のブロードウェイ・ミュージカル *Westside Story* は、敵対する移民間の恋愛悲劇だが、これも原作か

らの翻案である。片や『能ロミオとジュリエット』は、日本の伝統演劇への翻案である。“能シェイクスピア”には、シェイクスピア劇に対しても能に対しても勇猛果敢な挑戦が見られる。上田氏の独創的な試みは、演劇の多様な可能性を探るものとして注目を浴びるに違いない。

(元杏林大学教授、博士(文学))